武蔵野幕屋　日曜聖書講筵

「グローサ」

――ヤコブ書第３章――

１９５７年５月26日
小池辰雄

舌は一生の車輪を燃す　グローサ（舌）　父の五十回忌は真言宗で　即身即仏の世界　上昇と下降　神の霊言が霊泉している　異言　祈り

【ヤコブ３】

1わが兄弟よ、なんじら多く教師となるな。教師たる我らの更に厳しき審判を受くることを、汝ら知ればなり。2我らは皆しばしば躓く者なり、人もし言に蹉跌なくば、これ全き人にして全身に轡を著け得るなり。3われら馬を己に馴わせんために轡をその口に置くときは、その全身を馭し得るなり。4また船を見よ、その形は大きく、かつ激しき風に追わるるとも、最小き舵にて舵人の欲するままに運すなり。5斯くのごとく舌もまた小きものなれど、その誇るところ大なり。視よ、いかに小き火の、いかに大なる林を燃すかを。6舌は火なり、不義の世界なり、舌は我らの肢体の中にて、全身を汚し、また地獄より燃え出でて一生の車輪を燃すものなり。7獣・鳥・匍うもの・海にあるもの等、さまざまの種類みな制せらる、既に人に制せられたり。8されど誰も舌を制すること能わず、舌は動きて止まぬ悪にして死の毒の満つるものなり。9われら之をもて主たる父を讃め、また之をもて神に象りて造られたる人を詛う。10讃美と呪詛と同じ口より出づ。わが兄弟よ、かかる事はあるべきにあらず。11泉は同じ穴より甘き水と苦き水とを出さんや。12わが兄弟よ、無花果の樹オリブの実を結び、葡萄の樹、無花果の実を結ぶことを得んや。斯くのごとく塩水は甘き水を出すこと能わず。

13汝等のうち智くして慧き者は誰なるか、その人は善き行状により柔和なる智慧をもて行為を顕すべし。14されど汝等もし心のうちに苦き妬と党派心とを懐かば、誇るな、真理に悖りて偽るな。15かかる智慧は上より下るにあらず、地に属し、情慾に属し、悪鬼に属するものなり。16妬と党派心とある所には乱と各様の悪しき業とあればなり。17されど上よりの智慧は第一に潔よく、次に平和・寛容・温順また憐憫と善き果とに満ち、人を偏り視ず、虚偽なきものなり。18義の果は平和をおこなう者の平和をもて播くに因るな

り。

●舌は一生の車輪を燃す

1わが兄弟よ、なんじら多く教師となるな。教師たる我らの更に厳しき審判を受くることを、汝ら知ればなり。

ユダヤの集会においては勿論、ラビが居ましたけれども、また集会において随意に先導になって話すこともあったらしい。原始キリスト教会もそうでありまして、特に指導的な地位に立って語る人、それは責任が重いのであって、逆に厳しく審きを受ける。

「自分は聖書のことを語っている」

と、語っていることによって何か自分がより勝っている如くに、もし思うならば、それはとんでもない錯覚であって、かえって神さまの厳しい審きを受けるというので、我々、特に職業的にも教師というような位置にある者は深く誡めなければならない言葉です。

2我らは皆しばしば躓く者なり、

躓いたり、転んだり、倒れたり、滑ったり、いろいろです。

人もし言に蹉跌なくば、これ全き人にして全身に轡を著け得るなり。3われら馬を己に馴わせんために轡をその口に置くときは、その全身を駆し得るなり。

人間は特に理性的存在であると哲学者は言いますが、また文学者からいわせれば、人間は言葉の動物であるというかも知れません。それほど、言葉というものは人間社会において絶対不可欠の要素です。けれども、みんなこれは言葉があるので、人間には解することができない言葉をみんな持っている。蟻でもそうです。非常に動物を愛し、かつまた霊的な人になると、そういった昆虫、動物の言葉を弁えることができるような境地にまで入ることができるようです。それはいわゆる我々が言う言葉という概念とは違う表現でしょうけれども、動物というものは非常に感覚がむしろ全身的ですから、表現も全身的であるから、口ばっかりでない。そこに分裂のない在り方をする。だからかえって、猫だとか犬だとか彼らの表現には分裂がないから、そこにおいて言葉を、心の現われをキャッチすることができるわけです。ところが、人間は言葉が自由であるだけ、逆に非常にこれが複雑な構造をもってくる。そして、心と言葉が相即しない場合が非常に多くなってくるわけです。

「巧言令色、鮮矣仁」

なんていう言葉もあるようなわけです。巧みなる言葉を使い、また巧みなる上辺の色をなしている人は、かえって飾りであって、心の内はむしろ仁が鮮い。愛が乏しい。

いつか塚本先生が藤井先生のことを、藤井先生は文章がうまいものだから、「巧言令色、鮮矣仁」と半分、冗談でおっしゃったんでしょうけれども、藤井先生はとても怒ってしまって、絶交状をたたきつけられたことを、藤井先生自身から聞きましたが、

「まぁ、しかし、そんなに怒るなよ」

というわけで、それはまぁ勿論、親しい仲にまた戻りましたけれども。もっとも藤井先生の文章のうまいというのは、一応言われているけれども、それは「うまい」というのではないので、ただ先生は真理を如何に表現するかに苦心され、またその意味において、滲み出ているところの文章です。勿論、言葉に、或る意味においては達者な方でしょうが、しかし、いわゆる文豪、文人という者に比べたら、藤井先生の文章は所謂(いわゆる)そういった文章ではない。やっぱり、真実のこもった文章ですから、「巧言令色」では勿論ないわけです。言葉というのは非常に自由であるだけに、これが危ない。即ち、私たちは言葉を自由に使う。この自由というのは非常に危険なわけです。

それはまぁ一応それだけのことにしまして、この自由な言葉を本当の意味において、

「躓きなく言葉を発しているならば、その人は全き人である。全身に轡(くつわ)をつけうる人である」

と、ヤコブは言っている。全身に轡をつけ得る。全身というのは、その人のすべての活動、機能を制することができる人である。それに間違いを起こさないように、なし得る人である。即ち、全身を本当に自由に、本当の意味において、自由に使える人である。我々の欲望を自由に制御できる人である。こういうようなわけです。

3われら馬を己に馴(したが)わせんために轡(くつわ)をその口に置くときは、その全身を駁(まわ)し得るなり。

馬の轡によって全身を、馬を御していく。

4また船を見よ、その形は大きく、かつ激しき風に追わるるとも、最小(いとちいさ)き舵(かじ)にて舵人(かじとり)の欲するままに運(まわ)すなり。5斯くのごとく舌もまた小きものなれど、その誇るところ大なり。

「その誇るところ大なり」というのは、大言壮語をするということ。

視よ、いかに小き火の、いかに大なる林を燃(もや)すかを。

山火事というのは、始めちょっと木と木がすれて、そこに火花が散ったと思ったら、木と木がすれる時には風があるから、それで大きな火事になる。どこどこの大火というようなことも、原因をたずねてみると、煙草の煙であったり、子どもがちょっといたずらをしたりということが、何百何千の人に災いをかけてしまったり、あるいは死人まで出すことになったり、財貨でいえば、何千万円の、あるいは損害ということになるわけです。

6舌は火なり、不義の世界なり、舌は我らの肢体の中にて、全身を汚し、また地獄より燃え出でて一生の車輪を燃(もや)すものなり。

非常に強い言葉です。

6節は非常にすごい言葉です。まぁ現象学でもないけれども、現象的にいっても、人間

の世界で、もし舌に誤りがなければ世界は平和であるといっても、言い過ぎない位です。人と人との間も、みんな感情の齟齬とか、あるいは白眼とか、陰口を聞くという、人の悪口を言う、譏る、批判する、これはみんな舌のわざわいです。すべての悪しきことの原因として、この舌というやつが働きをなす。舌は勿論、言葉として発する舌です。「二枚舌を使う」とか、「言を左右する」とか、まぁいろんな事があるわけです。

「一生の車輪を燃すものなり」

と。人間の活動を車輪のようにいったわけで、それを燃やし尽くしてしまう、潰滅させてしまうという。

7 **獣・鳥・匍うもの・海にあるもの等、さまざまの種類みな制せらる、既に人に制せられたり。**

「種類」という字は「フィーシス」というから、種類と読むよりむしろ、「キャラクター」「性質」「実質」というようなことです。「性質」といっても観念的な意味でなくて、

「獣・鳥・匍うもの・海にあるもの等、さまざまの種類――その性質のもの――はみな制せらる、既に人に制せられたり」

人の「フィーシス」に制せられている。

8 **されど誰も舌を制すること能わず、**

けれども、舌だけは誰も本当にこれを制することができない。

舌は動きて止まぬ悪にして死の毒の満つるものなり。

「動きて止まぬ」というのは、よろよろと動いてどうも始末が悪いというような字です。

9 **われら之をもて主たる父を讃め、また之をもて神に象りて造られたる人を詛う。**

初めてここでもって、「主たる父を讃め」という、9節に至って舌が初めていいことをすることが出てますが、それまではみんな舌が悪いものであるように取り扱っている。

「主たる父を讃め、また之をもて神に象りて造られたる人を詛う」

神を讃美するかと思うと、片一方では詛う。この二つのまるで反したことを同じ一つの舌がやる、とこういうんですね。

10 **讃美と呪詛と同じ口より出づ。わが兄弟よ、かかる事はあるべきにあらず。**

11 **泉は同じ穴より甘き水と苦き水とを出さんや。**

12 **わが兄弟よ、無花果の樹オリブの実を結び、葡萄の樹、無花果の実を結ぶことを得んや。斯くのごとく塩水は甘き水を出すこと能わず。**

●グローサ（舌）

「舌」という字は

「グローサ」

といいまして、今日ここに「グローサ」と書いたのは舌のことです。女性名詞です。旧約聖書の創世記11章1節には、有名な「バベルの塔」のところですが、

「全地に一つの言語（ことば）、一つの音のみなりき」

と書いてある。この「一つの言葉」という字が「舌」という字なんです。ヘブライ語では「サーファー」という字です。「音」の方は「レバリーム」で、むしろ「言葉」という字です。「サーファー」と、「ダーバル」と書いてある。

「一つの舌と一つの言葉である」

と。「一つ」というのは「一様に通ずるところの」という意味です。その場合の「舌」というのは、ただ生理的な舌を言っているのではないので、勿論、「グローサ」（舌）という言葉の意味には、

「古い或る神秘的な要素をもった人間の表現様式」

と字引にも書いてありますが。それから思っても、私は面白く思う。この一つの舌、一つの言葉という、この「一つ」というのは、それが「一致した」「相通ずるところの」といった気持だろうと思う。いろいろ民族によって言葉は違う。けれども、何故それは「一つ」であるか。いわゆる、

「音楽は世界の言葉である」

といわれる。世界的な言葉は音楽である。これは全ての人の感情を、またそれらの理解力に通ずるという。言葉は違っても、どうして通ずるか。それは言葉の奥の世界。言葉は即ち思念の、心の、思いの、また心の表現であることは、言うまでもないことです。即ち、心が一つであるならば、言葉は、あるいは表現様式は変わっても、それは通ずるはずのものです。そういう意味において、私たちはなるほど世界中言葉が違って不便だけれども、心が一つになっていくならば、言葉は通じる。その反対に、心が分かれ分かれになって乱れて、心がお互いにちぐはぐな心でいたならば、言葉は同じ言葉を語っていても、この言葉は通じていない。

問題は、今そこにヤコブも言っている通りに――これは大事なところですね――

「泉は同じ穴より甘き水と苦（にが）き水とを出さんや」

「泉」といっている。何故、ヤコブは泉と言っているか。泉は即ち心の泉、心泉とでも言いたい。心の泉。この心の泉が甘ければ、甘い水が出てくるし、心の泉が苦ければ、苦い水が出てくる。ところが、その心の泉は実に分裂している心の泉で、我々の心の泉が、ある時は甘い水を出してみたり、ある時は苦い水を出してみたり、様々のことをやる。だから、そんなことはあるべきことでないと、ヤコブが言っているわけです。それは本当の心の泉ではない。それは泉が本当の泉ではない。それは溜（た）まった水みたいなものだ。

いうまでもなく、問題は「舌」「グローサ」そのものにあるのではなくて、「グローサ」が本当にグローサであるためには、「舌」から発するところの言葉が本当に言葉であるためには、

その中の心の世界はいうまでもなく、霊魂、霊の世界と離すことができません。「プニューマ」と「カルディア」。この「プニューマ」は霊魂の世界。心の世界は「カルディア」です。あるいは、「ヌース」という。

そういうわけで、本当は人間の

「舌は一つ、言葉は一つ」

であった。楽園においては一体。何と一つなんですか。アダム・イブは本当は神さまと一つであった。何が一つか。神の聖意と人間の意とが一つ。神の聖意と人間の意が相応えている時に、本当に心は泉することができる。泉は地下から滾々と湧いています。けれども、これは天から雨が降らなければ、やっぱり泉は泉するわけにいかない。

●ポラリテート（両極性）

私はこの頃、つくづく思います。ゲーテという人は万象を見て、あの人は自然と我とが一体になるような角度でものを見ている。そして、自然の背後には神がある。

「神―自然―我」

というものがすうっと貫いているような角度の人なんです。彼はものの現象を見て――『自然について』という論文がありますが――自然の中には

「ポラリテート」（Polarität　両極性）

というものがある。両極性は、互いに反発する力と、互いに引き寄せる力と、二つの力をもって働いている。自然界を見ていると、電気の世界にも、プラスとマイナスがあるようなわけで、遠心力的な方向と、求心的な方向と――力の諸々の形態を見ていると――遠心力的か、求心力的かと、そういった作用をもって、自然界の力というものは動いている。もう一つ、

「シュタイゲルング」（Steigerung　上昇）

といって、上昇的な角度で動いているものがある。それが進歩発展の展開で、そのようにして世界は時間的には、この上昇的な角度で、空間的には――これは時間的ばかりとは言えませんけれども――

「引力的な求心的と、遠心的との、こういった相において自然界というのは動いている」

というようなことを言っています。

そして、「霊魂」「ガイスト」の世界は、「シュタイゲルング」、上昇的な角度が主導的である。また事実、この肉体の世界――さっきの「フィーシス」という字です――

「この物質、質量の世界では、求心と遠心の力、求心力と遠心力的なのが主導的である。けれども、この霊魂の世界と、身体の世界、これは切り離してはいかん。それを切り離して考えがちだが、それは間違いだ。霊魂と肉体とは互いに相互作

用をしていて、勿論このシュタイゲルング、霊魂（たましい）の方が主導的である」ことは言っております。こういったことを聞いても勿論、現代医学というものは、ゲーテが言ったような構造すらも本当に自覚してないような始末で、人間の質量的な肉体というものを主導的に人間を考えていたら、それは医学は大きな欠陥を犯している。

乗り越えて展開して、進展して止まないところの事態を、私が読んだ限りにおいては、ゲーテはまだその先は言ってない。どこかで言っているか知りませんが、多分、他の角度から見れば、それは言っているところがないとは勿論、言えませんけれども、大事なことはこの「シュタイゲルング」（上昇）ではなくて、上から降りてくるもの、上から落下してくるところの角度を忘れてはいかん。これは自然界の単なる観察からは出てこないです、この「落下〔herabfallen（ヘルアップファレン）〕」というのは。勿論、さっき言ったように、雨は天から降ってくると、これは自然界の観察から出てきますけれども。

この「落下」というものは、上から降りてくる。地球の超越的な角度から、太陽の光は降りてきます。太陽の光は、世界内の外から、我々のいわゆる世界、地球という世界の外から光が来ている。地球は、地球上のものをもって生きてはいない。地球は、地球を絶したところのものによって、その光によって、その吸引力によって、生かされている。その光が落下し、その力が向こうから来て、これを吸引しているわけでしょ。

しかしながら、吸引だけであったらば、これは勿論、地球が太陽にすうっと吸われてしまったら、焼かれておしまいですけれども、そこに遠心力的な活動があるから、そこに生命の保ちがあるわけです、地球という命の。けれども、とにかくこいつが降りてくる。これが「求め」ですよ。

「人、新たに生まれずば、人、上より生まれずば、天国に入ることができない。神の国に入ることができない」

これは絶対に真理です。この「上から」という事態が、「超越の世界から」という事態が――空間的にいえば、「上から」というが、もう少し次元的にいえば――この超越の世界から、絶対次元の世界によって、動かされていく。

私たちの舌は言葉を発する。この舌の、言葉を発する奥は、心の世界である。心の世界の一番根源は霊魂の世界である。そこが泉の世界、霊泉といってもいい。霊の泉。心泉、霊泉です。この霊泉が枯渇してしまったら、どうにもならん。霊泉が枯渇しているから、発するところの舌が様々の悪しきことをなす。分裂をなす。この霊泉はどうするか。いうまでもなく、これは神から言葉を受けていなければダメです。神から言葉を受けてなければ、我々の言葉は言葉にならない。神言、神の言葉を、神言を受けなくてはいかん。神の言葉を。神言はまた真言（しんごん）である。真（まこと）の言葉です。神の言葉はまた真理（まこと）の言葉である。

「すべての人、偽るとも神を真とせよ」

という。

●父の五十回忌は真言宗で

昨日、私の父の五十回忌を、私の兄〔龍二〕がちょうど大阪からきましたから――昨日がその日ではないけれどもとにかく五十年で――致しました。お父さんの肖像を掲げて。私は殆ど父親を断片的にしか、小さい幼児でしたから、知りませんけれども。そして今、残っているのは私の兄と私と二人っきり、家族全部八人(註)のうちたった二人になってしまった。

〔註：家族八人。父小池政吉（1856～1908）享年52才、母光子（1869～1957）88才、政美（1895～1921）26才、龍二（1898～1993）95才、富士子（1899～1949）50才、三郎（1901～1901）0才、辰雄（1904～1996）92才、愛子（1907～1914）7才〕

私の父は日蓮宗で、自分だけ日蓮宗だったという話ですが、けれども日蓮宗の坊さんが近所にいないものだから、向こうの姉が世話してくれた近所の真言宗のお寺があったから、その坊さんに来てもらった。まぁ同じ仏教で、すみませんというわけで、真言宗の坊さんに来てもらってお経をあげてもらった。昔の、無教会信仰の私だったら、そんな席には出なかったでしょうし、第一、反対して、

「いや大いにキリスト教でやっちゃいましょう」

なんてことだったかも知れませんが、けれどもとにかく、兄さんと私は、その真言宗の坊さんにお経をあげてもらった。ちっとも、私はそれで、どうってことはないんです。

というのは、もし今までのように、いわゆるクリスチャンのように他宗を排撃するような角度でいたならば、まだそれでは相対的な立場でしてね、私にとっては、このキリストの光は太陽の光みたいで、一切を包摂する光です。すべてを包摂してしまうので、仏教の世界も結構です。仏教、仏の世界にもたくさん真理があります。しかし、それはこのキリストの光の中にみんな入ってしまう。

そういったわけで、私は本当に無なんです。私は無だから、キリストが無限となってくださるから、楽なんです。立場も、足場も、主義も、主張も、何もない。私はただキリストという無限なるものの中に、一切の人間の限定を超えたこの驚くべき真理の中に自分は入っていくだけです。それで、私は

「無的実存」

と申します。無的実存のことを、とやかくといろいろなことを言う人があります。結構です。どう言われてもいいんです、私は。

「イエス・キリストが無的実存であった」

と私は思うから、このイエス・キリストの中に入ることが即ち、無的実存とされることだから。

「我は何事も為し能わず、何事も言うことができない。我を遣わし給いし者の

聖意を行っているだけだ」

と、キリスト自ら言われたんです。

「**何ぞ我を善きと言うか**」

と言われた。即ち、イエスは自分を無と言ったので、この無はただ形而上学的な、ただ自然科学的な無ではない。哲学的な虚無の無ではないですよ、この無は。本当に己を虚しうしているところの、

「神一切！」

というところの無です、キリストの無というのは。だから、彼において神が一切なし給うたんです。私は勿論、これを信仰として受けとっているので、

「私が現実に無の人である」

と、そんなことを言っているのではない。

「キリストの十字架が私に無を与えている」

ので、自ら無となったというのではない。

「キリストの十字架が私に無を与える。そうしたら、キリストの復活の生命が私を無限となしつつあり給う、限りなく」

「これでいい」なんてことは絶対にない。地上では、ただあわれな、みじめな弧〔三日月〕に過ぎない。いつか神さまが完全な円〔満月〕にしてくださる。ブラウニングが言ったとおり。それで、弧でありながら、この弧は満ちているんですよ。常に満ちつつあるところの、プレローマ（充満）しつつあるところの弧です。単なる嘆いている弧ではない。この中に驚くべきプレローマが来つつあるところの弧だから、これは円に展開せざるを得ない。

「**我は今日も明日も次の日も進み行かざるを得ない**」

という弧なんです。そういう、この無というものです。

●即身即仏の世界

えー、どういうところからこういうことになったか知りませんが……、ああ、真言宗から脱線しましたね。私は真言宗の坊さんに、

「真言宗とは一体どういうんですか？　一言で、ちょっとすみませんけど、説明してください」

と言った。私はいろんなことを聞くものだから、坊さんも「これはおかしな男だ」と思ったかも知れませんが、聞くのは何も私はキリスト教と比較しようという気持で聞いているのでも何でもない。真言宗の最澄、空海は偉い坊さんですよ。私は謙虚にそう言ったら、

「心と言葉と身とが、心・言・身が一貫一如になるという相が真言の相（すがた）である」

と答えた。心と言葉と身体とが一貫一如になる、その時に初めて即身即仏となる。この生（なま）の身が直ちに仏の事態、即身即仏の世界である。真言宗がどのようにして、そこにいくか

というようなことは、それは詳しくは聞きませんでしたけれども、その坊さんは「自力的な角度」とは言ってました。その自力ということは、単なる精進ばかりでは勿論ないようです。自力と言おうと、他力と言おうと、本当の仏の世界に入るには、やはり表現は違っても、やり方は違っても、そこには共通なものがあると私は思っている。だから、仏教も宗派争いしてはいかん。宗派争いする仏教なんか、私は本当の仏教だと思わない。

相手の立場、主義、主張は、確かに真理がある。また、そこにも限界がある。結構です。みんなこれは弧みたいなものなんだから。けれども、その弧において一体、本ものがあるかどうかが、問題なんです。問題は本ものがそこの弧に来ているかどうか。ところが、

「あれは間違いで、こちらはいい」

と言って、相対的に見ているものは、見ている人も見られている人もどっちも、それはそういうことをして争っているうちは、実は一番その霊泉から、霊の泉から、泉を汲んでいない。いや泉それ自身が霊泉していない。

そういうわけで、いわゆる相対的なキリスト教の、何々派だとか何とかいって――派も結構です、みんな人間の在り方だから、ある一つの形態をとるのは止むを得ない――大いに形態をとっていい。すみれの花はすみれとなります。菊は菊となります。けれども、すみれも菊も、お互いさまに「お前は花ではない」なんて、言ってやしません。それはみんな太陽の光を本当に受けているから、喜んで互いに調和をなしている。だから、本当に仏の光を受けていれば、浄土宗であろうと、真言宗であろうと、臨済宗であろうと、日蓮宗であろうと、結構です。それが本当の仏の世界に入っているならば。問題は、

「本当に仏の世界に入っているか」

ということです。メソジスト、バプテスト、やれ教会、やれ無教会の、カトリックのと、何でもいいですよ。けれども、そこで本ものであるならば、泉が本ものであるならば、そこにおいて交わったものはすべて、自ら乗り越えていく。自ら乗り越えていく。常に新たに本当に展開を自然にやっていく。

そういうわけで、その本ものとなるためには、超絶の世界から来ているところの、何ものかを受けなければならない。即ち、神の言葉、霊言を、

「わが言は霊なり、生命なり」

という、このキリストの言葉を受けなければ、キリストという言葉を受けなければね。キリストは神の言なんです。キリストの全存在は神の言なんですから。それを受けないことには絶対に我々も、ヤコブが

「どうのこうの、すべしすべからず」

なんていくら言ったって、それをいくら拳々服膺してたって、ダメなんです。問題はその泉にある。

「私たちの言葉の奥に霊泉があるか、心泉があるか、心の泉があるか、霊の泉があ

るか」

そこに焦点はぐっとくるわけです

●上昇と下降

だから、ヤコブは

「**舌は火なり**」

と言った。

「舌は火であって、善きその霊泉がないようなものならば、今度は地獄の火が燃えるぞ」

というんです、舌から。地獄の火が燃えるという。サタンは別な悪い霊を私たちの中に入れて、ヤコブがここで6節で言っているように、

「**舌は火なり、不義の世界なり。地獄より燃え出でて云々**」

と書いてある。即ち、地獄の火のような火で、諸々の人間の存在の虚偽と殺人と、モーセの十誡を破るような一切の事態は、みんなサタンの手下になっているから、舌が分裂しているわけです。舌が分裂している。その後の方に、

「**苦き妬みと党派心を懐く**」

「**情欲に属し、悪鬼に属するなり**」

と書いてあるでしょ。

13 **汝等のうち智くして慧き者は誰なるか、その人は善き行状により柔和なる智慧をもて行為を顕すべし。**

「柔和なる智慧」という訳し方は、「智慧にふさわしき柔和」と訳した方がいい。

「智慧にふさわしき柔和をもて行為を顕せ」

と。「智き」というのは、「ソフィヤ」という字で、「慧き」という方は「エピステーモン」という字で、非常に経験をよく積んだ、経験に基づいた智慧です。

14 **されど汝等もし心のうちに苦き妬と党派心とを懐かば、誇るな、真理に悖りて偽るな。** 15 **かかる智慧は上より下るにあらず、**

これが大事なんです。

かかる智慧は上より下るにあらず、地に属し、情慾に属し、悪鬼に属するものなり。

ゲーテが自然界を――自然界というのは人間界を全部ひっくるめての自然界を――観察して、「シュタイゲルング」（Steigerung、上昇）という、下から上へ展開していく角度を言った。この精神は、

「下から上へ展開して限りなく求めていく」

という、ゲルマン的な衝動、ファウスト的衝動、またローマン的な衝動、あるいは理想主

義的衝動です。それ自身は悪くはない。そういう衝動、努力の気持が人間になければダメです。キリストが「求めよ」というのはこれです。

「求めよ、さらば与えられん」

と。この衝動は結構なんですが、この衝動だけではダメです。これでいくならば、私たちに宗教の世界は要らない。では、何故、信仰が必要であるか。何故、世界はいくら努力しても平和は来ないか、戦争の歴史であるか。ということは、人間の努力は誠に素晴らしい文化を生んではいるけれども、その文化が本当の文化にならない。いつもぶっこわしている。即ち、バベルの塔をやっている。それは何かというと、

「与えられん」

ということ。この「求めよ」が、これは自分がただ段々上昇して行こうとする求めであって、まだ本当の求めでない。「求めよ」というのは、本当に上から来るものを求めなければ、「求めよ」にならない。このキリストの「求めよ」を受けとってはいない。即ち、

「上から来るものを求めなさい」

ということ。キリストを私たちは求めなければいけない。キリストは降臨した。神の世界から降臨して来たんです、このロゴス・キリストが。即ち、天界の言たるキリストがこの地界にイエス・キリストとなって現われて来た。神の真理の表現体がイエス・キリストなのではないですか。イエス・キリストは上から下って来た神の表現体です。これに結びつくときに救い上げられる。けれども、結びつけなかったですよ、あの当時の人々は、キリストがせっかく来たけれども。私たちも勿論、結びつけない。生まのキリストには結びつけない。どうしても、私たちがいっぺんキリストによって浄化されなければ。この浄化は十字架の罪の贖いです。この罪の贖いの十字架にぶつからない限りはダメなんです。

「我は十字架を通って天界に行ってしまう。わが去るは汝らに益である。再びやって来る。御霊としてやって来る」

と。この御霊のキリストがやって来て、私たちに今度は本当の上昇に、上からの力によって私たちは本当の上昇に行ける。この上昇は決して疲れない。これは限りなく上に向かって行く。限りなく神の世界に入っていく。これなんです。

だから、いつも書いている通り、こういう放物線的なカーブ〔始めは上昇し山頂に達したあと下降していく山形のカーブ〕では、

「大いに私の信仰を強くしよう」

なんてやっているうちは、終いにくたびれてダメになります。そんな「自分の信仰」なんてものは考えない。上からくるところの力に自分をすっかりまかせる。そうしたらば、これが逆に上昇していく。これと反対のカーブ〔始めは下降し谷底に達したあと上昇していく谷型のカーブ〕です。だから、「上からの」と今、ヤコブが言っているところの、

「かかる智慧は上より下りきたるにあらず」

という、下から出ている智慧はどんなに立派そうに見えても、それはダメなんです。

我々が与えられている一切の能力はみんな結構なんです。けれども、その能力が霊泉を、神の泉を持たないものだから、みんなこれが私されてしまう。だから、争い、憎み、妬みと様々の悪しきことに変わっていく。それが

「地に属し、情欲に属し、悪鬼に属するものなり」

という事態。それは実は、地獄の方からサタンの力が来て、操られているようなわけです。サタンの力で操られている。その事態はこの次に習うところのヤコブ書４章のところにも書いてある。５節、

「5**聖書に『神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚しきことと汝ら思うか。」（ヤコブ４・５）**

私たちの霊がサタンに取られていたのではダメ。それを神の世界に入れようというのを、

「妬むほどに慕い給う」

という表現で書いてある。

●神の霊言が霊泉している

それで、それはまぁ大すじでありますが、少し細かい箇所を開いてみますと、例えば「悪しきわざ」からいいますと、エレミヤ記の９章５節に、

「5**彼らはおのおの其隣を欺きかつ真実をいわず其舌に謊をかたることを教え悪をなすに労る」（エレミヤ９・５）**

舌はいかにいつわりやすいものであるか、ということは方々に出ている。詩篇の中にもあったはずです。詩篇34篇13節、

「13**なんじの舌をおさえて悪につかしめず なんじの口唇をおさえて虚偽をいわざらしめよ」（詩篇34・13）**

詩篇39篇１節、

「1**われ曩にいえり われ舌をもて罪をおかさざらんために我すべての途をつつしみ悪者のわがまえに在るあいだはわが口に衝をかけんと」（詩篇39・１）**

さっきの「くつわ」という字がここにも出てますね、「わが口に衝をかけん」という。詩篇57篇４節、

「4**わがたましいは群いる獅のなかにあり 火のごとくもゆる者 その歯は戈のごとく矢のごとくその舌はとき剣のごとき人の子のなかに我ふしぬ」（詩篇57・４）**

こういう悪いご連中の中にいるということが書いてある。まぁそんな箇所を方々引っ張りだしたら、箴言にもありますし、もう限りがないからやめますけれども。

それで、「舌」は、そういう意味においては、さっき言った地獄の火でありますが、けれども、

今いった天来の火が来たらば、この舌は神さまの言葉は火の如き言葉ですから、キリストの言葉は今度は逆に、

「火と聖霊をもってバプテスマする」

「この火、燃えたらんにはまた何をか要せん」

という、これは逆にみんな神の霊のことを言っているんです。即ち、神の霊に化せられた、化体された霊となれば、心となれば、今度はその言葉は本当に、

「我が骨の中に火の燃ゆるが如くなりて、忍ぶに疲れて耐え難し」

といって、エレミヤが神の言葉を発している。預言者がみなそのように、神の火の如き言葉によって火を発している。エリヤなんかもそうです。だから、

「我が言は霊なり生命なり」

と言われたキリストの言葉は、驚くべきそういった火の如く審き、また救いあげるところの言葉であります。このところでは、ヤコブは火というのを、地獄の火の方に譬えて言ったわけですが。

16 **妬みと党派心とある所には乱と各様の悪しき業とあればなり。** 17 **されど上よりの智慧は第一に潔よく、**

「潔く」というのは、聖らか、清潔な、「ハギノス」という字です。

次に平和・寛容・温順また憐憫と善き果とに満ち、人を偏り視ず、虚偽なきものなり。 18 **義の果は平和をおこなう者の平和をもて播くに因るなり。**

ガラテヤ書の5章のところの、「聖霊の果」と似たようなことをここでも書いてあるわけです。上よりの智慧は、第一に聖なるものである。神の清らかなる――無色透明ですね――清らかにして熱いんです。だからむしろ、それは白熱的です。神さまの白熱的な霊に触れる。そうすると、その人の言葉は白熱的な、そういった能力を持ってくる。これが即ち、神の言葉、神言であり、さっきいった真言の事態に私たちを貫くわけです。

だから、私たちにとって、言葉が単に言葉であるうちはダメです。霊と心と思い、霊と心と言葉とが、貫いているものでなければ、言葉とはいえない。言葉は、言葉の面をまだ考えて、その現象面だけを考えているうちは、いつまでたってもダメなんです。それでは、言葉を自由に操るというのは、それはもう邪なる霊なんです、言葉を自由に操るとはね。言葉が本当に自由であるというのは、操る世界ではない。操る世界は分裂している世界なんです。言葉が本当に自由である。この言葉が本当に自由であるというのは、霊魂が本当に自由にならなければ、言葉は本当に自由ではない。いわゆる自由は自由ではない。

そこで、霊魂が本当に自由であるということは、霊魂が完全にキリストにとらえられている。キリストの中に、キリストの霊の中に本当に入っている時に、私たちの霊魂は本当に自由である。その時に私たちは分裂がないですから、言葉が自ずから発せられる。即ち、泉が泉しているんですから、それがほとばしって流れていく。この泉の流れが即ち言葉な

んですから、操っているのではない。かく流れざるを得ない、かく発せざるを得ない、という言葉が本当の言葉なんです。こういうことになる。いわゆる名文美文が本当の文章ではない。霊魂の中から切々としてほとばしっているところの、止むにやまれない表現は、それが本当の文である。

「文は人なり」

というが、本当の意味において、

「文は心なり、文は霊魂なり」

です。

だから、聖書の文句は何故、永遠に力を持っているか。どんなに偉大な文学が来ても、この聖書にかなわないのは何故であるか。これは、聖書は、その意味において真言（しんごん）であるからです。真（まこと）の言葉だからです。神の霊の発している言葉、霊言であるからです。

「わが言は霊なり生命である」

からです。そういった意味において、私たちは言葉を問題にして、言葉をつつしむというようなことでなくして――勿論、人間だからそういう面も日常生活には必要でしょう――けれども、大事なことは、

「私たちが霊魂の世界を常にキリストに結びつけていること。そして、人間のいわゆる相対的な立場に立たないこと」

どんな環境、どんな運命におきましても、本当に支配していくことのできる世界は、自分を本当に無にしてしまっているところの、無として、無限のキリストを受けとっているところの、神の霊言が霊泉しているところの世界です。そうして来たらば、人のそしりや、あるいは妬みや争いや悪口言われても、何言われても楽になる。そんなことはどうでもよくなる。ああ、何とでも結構ですと。神さまの言葉はそこにおいて勝利している。自分が即ち神の言葉ですから。

「自分が即ちキリストの言葉となる」

自分が即ちキリストの言葉となっているんですから、一言も発しなくてもいい。全存在が言葉である。この存在が言葉とならずして、本当の言葉なんて出てくるものではない。そういう意味において、私たちは「舌」「グローサ」ということにおいて、根源的な事態をやっぱり中心として考え、上から来ているところの智慧、聖霊の智慧におけるところのものである。

そして、その最後の性格は、何といっても愛であります。愛の言葉が一切を救う。キリストにおける愛というものが、この愛の生命が、言葉の本当の奥にこもっているならば、たとえそれが怒りを発していても、それが本当に愛から発しているところの怒りであるならば、必ず相手を救い上げていく力を持っていくんです。

神さまの審きは決して審判ではない。本当にその人を救おうとするところの、愛の異な

る表現に過ぎない。本当に人を斬ってしまっているようなのは、これは神の世界ではない。神の世界は人を本当に救い上げていく。深い赦しはまた恐ろしい審きなんですよ、反対にいうと。本当の審判は深い赦しなんです。赦しを持っている。

この意味において、審判（さばき）と憐憫（あわれみ）というものは、キリストにおいては、相即、離すことのできない事態です。

「ただし、それを拒むようなことであったならば、もうどうにもならない」

と、聖書に書いてある。またそういった意味における、

「御霊の事態に逆らう罪は、これだけは赦されない」

と書いてある。砕けてくる人は、それは本当に赦されますけれども、そうでない限りは、それは赦されない。

●異言

私たちも言葉、舌ということは結局、問題はその泉のところに来る。霊魂の泉の世界にやってくる。そして、最後にもう一つ、この「グローサ」という言葉が意味するところの、もう一つ別な意味がある。それはコリント前書12章、14章に出てくるところの、日本語で「異言」と訳してあるところの事態。これはやっぱり「グローサ」という、「舌」という字です。異言という訳があまり感心しません。ルターは

「舌の言葉、語らい」〔Zungen-sprache, Zungen-rede〕

といっていますが、ウェンタンという人が、ルターの訳も結構だが、しかし、これは

「霊の言葉」〔Geistes-sprache〕

と訳したかったと書いてある。私は大いに賛成です。「霊言」、「ガイステス・シュプラーヘ」。「異言」と訳された言葉を「霊言」と訳したい。この舌は祈りの世界で、神の霊に深く、キリストの霊に深く化体せられた時に、祈りが、普通の言葉が別な音に変わることがある。切り換わることがある。その時に――お経の世界にもありますが、「陀羅尼（だらに）」というようなもの――その霊言は普通の人が、我々が理性で判断することのできない言葉です。しかし、その異言、グローサもいろいろ種類があって、普通の言葉を発しながら、霊言であることもある。それはペンテコステで学ぶところの、使徒行伝2章の霊言です。

異言の事態は、別にここでご説明しませんが、これがやっぱり、「グローサ」という言葉ですから、「舌」というわけです。そして、

「天使の言葉を、人がいまだ語るまじき言葉を自分は聴いた」

と、パウロがコリント後書12章で言っているところの、あれもみな「グローサ」です。そういった言葉を聴いている。

それから、マルコ伝の終りの方に書いてあるところの、

「新しき言」

という字がやっぱりグローサなので、あの「新しき」というのは「質の違う」という意味です。ただ時間的に新しいのではない。マルコ伝16章14節、復活のキリストが言われたところです。

「14其ののち十一弟子の食しおる時に、イエス現れて、己が甦えりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固なるとを責め給う。15かくて彼らに言いたもう『全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣伝えよ。16信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。17信ずる者には此等の徴ともなわん。即ち我が名によりて悪鬼を逐いいだし、新しき言をかたり、18蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん』」（マルコ16・14～18）

という凄いことが書いてある。「新しき言」というのは、これが「グローサイス・カイナイス」と書いてあって、質の違った、次元の違った、新しい言、舌、グローサ、即ちこれが霊言です。

「19語り終えてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に坐し給う。20弟子たち出でて、あまねく福音を宣伝え、主も亦ともに働き、伴うところの徴をもて、御言を確うし給えり」（マルコ16・19～20）

私たちは、この意味において、私たちの生涯というのは――話はちょっとズレますけれども、今この「徴」という言葉があったから――生涯が徴でなければダメですよ、徴でないような生涯では。

キリストは神の徴です。神の表現体。「象徴」というではないですか。象をとって現われたものを象徴という。即ち、私たちはキリストを、象をもって徴すものでなければならない。その意味において、私たちは交わりの世界で言葉でありますが、この言葉の中に、キリストの霊の愛が本当に満ちている。それならば、存在が即また言葉として、また言葉が決して人をわざわいするようなことにならず、この世界はどんなに幸福なことになるでしょう。電車の中で何か人に聞かれても、これに答える言葉に愛がこもっているか、ただ義務的に答えるか、嫌々で答えるか、もう違うんですよ、これはみんな泉が本ものであるならば。泉が本ものでなければ、我々の言葉がわざわいとなる。泉が本ものであるならば、人を幸福していく。小さなことであって、決して小さなことでない。終ります。

●祈り

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言に光があり、生命があり」

愛があると。それは即ちキリストという言であり、

「我が言は霊なり生命なり」

「聖書は我につきて証するものなり」

と言い、まことにこの聖書は貴神の聖言。またキリストはその中心。貴神はそれをもって顕されたる一切。神さま、感謝いたします。

私たち人間の交わりは言をもって行われております。しかし、この言の源泉が枯れてしまい、またこれが地獄の火に焼かれて、わざわいされております。分裂しております。神さま、このような事態、世界は戦争また戦争、憎しみまた憎しみ、悪が横行。一切これ、言の禍といっても過言でないのであります。この時において本当に神言を発するところのもの、誠に神さま、貴神の神言たるこの聖書にすっかり、私たちの言葉の源泉を戴き、そしてこのイエス・キリストがその源泉として私たちの舌の奥に、この言葉の奥に、思いの奥に、霊の中に、イエス・キリストの霊泉が泉し給いまして、我々の言葉が真にキリストにおける自由であることができますように願い奉ります。この自由は人を救わんための自由であり、人を愛する自由であります。

神さま、世界に花がなかったならば誠に荒漠たるものです。しかし、花は太陽の光の言葉として、にぎやかに咲いております。そのように私たちのまた言葉も、貴神の讃美となり、貴神に栄光を帰し、一切を讃えるところの言葉となり、歌となっていくことができますように願い奉ります。

お父様、世界は神を讃える言葉となり舌となるならば、世界は平和ならざるを得ません。どうか、我々の舌が即ち、貴神を讃える舌であることができますように。貴神を指し示すところの存在であることができますように、いよいよ願い奉ります。

斯くして、お父様、一切のものを乗り越え、一切を包み、一切を荷っていくところの驚くべき事態が発するのであります。我々の禍なる言葉が本当にキリストによって幸福なる言葉とせられることができますように願い奉ります。この小さき現象の奥に、現象即本体、このことを思い、いよいよこの本体界に私たちの霊魂を集中せしめ、そこにおいて生き、そこにおいて泉し、そこにおいて光り、そこから流れるところの事態であることができますように。一切は上からであります。一切はキリストからであります。

神さま、そのようにしてペンテコステを迎えていくことができますように願い奉ります。今、兄弟姉妹たちと共に、天来の驚くべきみ光、この生命、これに今、太陽の光を受けるよりも更に素晴らしく受けつつ、自然現象は即ち、神の言を語っております。どうか、いよいよ聖書を通し、現象を通し、一切においてキリストを学ぶことができますように願い奉ります。お父様、かくして、学びとり、これを呼吸し、喰らい行くことができますように願い奉ります。

今、心からの感謝と願い、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉ります。アーメン。